## 【富士市】

## 校務 DX 計画

- (1) 「GIGAスクール構想の下での校務の情報化に関する専門家会議」の提言を踏まえた 富士市の次世代校務DXの方向性について
  - ・富士市では現在、1台の校務用PCで校務と授業の両方に対応できる「二刀流」の環境を導入している。校務用と授業用のネットワークを分離することで、セキュリティを保ちながら教職員の業務の利便性の向上を目指したものである。これにより、場所や時間にとらわれない働き方が可能となり、富士市の教職員にとって柔軟かつ安全な働きやすい環境が実現している。
  - ・国の目指す校務DXに関する1つの大きな方針として、「校務系・学習系ネットワークの統合」が示されている。これは、校務支援システムサーバを市役所庁舎等に構築することで、①教職員が職員室以外から校務系システムへアクセスできないことや、②学習系データとの連携が困難となることを改善するためである。本市においては、①については、インターネットを経由して、教職員が職員室以外から校務系システムへアクセスすることが可能であり、時と場所を選ばない働き方が可能な環境が既に整備されている。②については、校務系と学習系のネットワークが分離されているため、データの円滑なやり取りや、データを活かした教育の高度化について、今後検討が必要な状況である。
  - ・今後は、上記の校務端末とネットワーク形式による業務環境を維持しつつ、クラウドベースの次世代の校務支援システムを整備し、様々なアプリ等との連携やダッシュボードの活用について検討を進め、校務DXを推進していく。
  - ・ダッシュボードについては、学習eポータル(L-gate)の機能を利用する方向で検討 を進めていく。特に「心の健康観察」機能とのデータ連携については、支援が必要 な子供の早期発見に大きく寄与するものと考え、できる限り早期の実装を目指す。
- (2) 「GIGAスクール構想の下での校務DX化チェックリスト」に基づく自己点検結果を踏まえた、富士市の校務DX化推進に向けた課題及び解決策等について
  - ① 教育委員会主催の研修

教育委員会が主催する自主参加型を含めた各種研修会では、研修の内容によって 必要であればオンラインで実施している。また、研修会へ端末の持ち込むことや、 資料の共有やアンケートをクラウドアプリ上で行うこともよく行われている。この ように、GIGAスクール構想に伴い、研修のデジタル化も確実に定着が進んでいる。 ただし、研修動画のアーカイブ化については進んでいないのが実情であるため、 教職員のニーズをもとに、柔軟な参加形態が可能となる研修のオンデマンド視聴環 境の整備を進める。

② 学校との事務手続き

教育委員会から学校に調査等を依頼する場合、クラウドを利用したアンケートフォームで回答を求める方法へと積極的に移行している。これは、学校から各家庭にアンケート等を依頼する場合も同様で、ここ数年で一気にデジタル化が進んだ。

令和7年度からは、教育委員会と学校とのやり取りにおいて、FAXを利用する機会は緊急を要する場合のみとする「脱FAX」方針を明確に示す。メールやクラウドツールのより一層の活用を推進し、連絡手段としての日常化を図る。

また、各種事務手続きについては、報告内容の性質上、紙媒体での回収や押印を求めるものが少なからず存在する。令和7年度は、教育委員会内各課において、紙媒体や押印を求めている書類や報告書を洗い出し、その数を必要最小限まで減らすよう検討する場を設けるとともに、Webアンケートツール等を用いた共用の集計システムや報告フォームを構築することで、ペーパーレス化及び教職員の事務処理に係る負担軽減を目指す。

## ③ 教職員と保護者間のデジタル化

保護者へのWebアンケートツールを用いた調査や面談等の日程調整については、 学校ごとにデジタル化に向けた取組が順調に進められている。一方で、保健の問診 票等の提出書類や資料を紙媒体で求めている学校はいまだ多く、移行が十分進んで いないことが課題に挙げられる。

令和7年度は、まずは保護者から学校への提出資料、特に保健の問診票等については、Webアンケートツール等を用いたデータ集約・管理ができるシステムの構築を試行的に実施し、提出書類のデジタル化を進めていくための足掛かりとする。

## ④ 生成AIの利活用

生成AIを活用した、教材やテスト問題、保護者向けお知らせ文書のたたき台の作成については、一部の教職員の利活用にとどまっており、学校での積極的な利活用には至っていない。

令和7年度は、生成AI利活用推進の年と位置付け、効果的な生成AI利活用実践例を全国の先進的な取組を行っている自治体から集め、教育委員会から積極的に情報発信を行い、教職員が生成AIの良さや適切な利用方法について理解を深められるよう、生成AIの利活用に向けた前向きな雰囲気の機運を高めていく。